SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

国立台湾師範大学コンサートと交流

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学教育学部 公開日: 2013-04-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小西, 潤子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/7216

国立台湾師範大学コンサートと交流

音楽教育講座　小西潤子

国立台湾師範大学（以下、ＮＴＮＵ）は、台湾省立師範学院を前身に1946年設立された。師範大学や学院の中で最も多い15,374名の学生数と、技術職を含む専任教員884名、兼任教員469名を有する。学部は、教育学部、文学部、理学部、芸術学部、科学学部、運動及びレジャー学部、国際及び儒教学部、音楽学部、管理学部、社会科学学部の10学部59学科、30学科28大学院の大学院からなる。音楽学部は、学士課程の音楽学科と修士課程の民族音楽研究科、博士課程の表演芸術研究科から構成される。ＮＴＮＵと静岡大学教育学部との交流は、2010年銭善華教授と筆者とのミクロネシアにおける共同研究に始まった。銭教授からの招聘により、筆者は2010年11月ＮＴＮＵでヤップ島の音楽文化について2回講演をした。また、本公演後の2011年7月17日から24日にかけて、ＮＴＮＵチームおよび南華大学の山口修教授とともにヤップ島で共同調査を行っている。さらに、2012年3月8日には、人文学部上利博規教授、同・大野旭教授とともに同国際交流センターを表敬訪問し、交流を深めている。

2011年6月29日、新幹線で静岡駅に到着したＮＴＮＵ一行を静岡駅で学生が出迎えた。そして、大学のバスでグランシップに移動し、財団法人静岡県文化財団スタッフによりグランシップ館内を案内していただき、静岡のコンサートホールと風景を満喫してもらった。滞在期間が限られるなかで、ＮＴＮＵ側が最も関心を持つであろう場所として選んだのである。当日はたまたま公演がなかったため、可動式大ホール・大地の中を見学することができ、また日常は解放されていない屋上を特別に見学させていただいた。短時間ではあったが、共に行動することでＮＴＮＵと静岡大学学生スタッフとの交流の第一歩となった。

写真１　グランシップ屋上の見学

さて、コンサートは6月30日静岡大学大学会館ホールにて開催した。来学に際して、ＮＴＮＵ大学院生ら6名で室内楽演奏団・絲竹樂團を編成した。使用した楽器は、笛、排灣族鼻笛、簫、琵琶、二胡、阮、揚琴、葫蘆絲であった。公演は独奏およびアンサンブルによる楽器演奏と銭教授による中国伝統音楽と楽器に関する解説からなり、通訳を兼ねた司会を筆者が務めた。演目は、古曲《十面埋伏》から地方の作品《中花六板》、現代曲（劉天華作曲《空山鳥語》）、台湾原住民の音楽《排灣族戀歌》と多様なジャンルからなり、特に《排灣族戀歌》はパイワン族に伝わる鼻笛を使った演奏であった（写真２）。

写真２　ＮＴＮＵ絲竹樂團演奏

公演に参加した学生からは、「どこか似たような面影があるが、鳴る音楽も響く音色も全然違い、文化って素晴らしい」「鼻笛は想像していたよりもずっとやわらかい音色で驚いた」「一番衝撃を受けたのは琵琶。指５本全部使っているのが印象的」「フワフワしたような感じ」などの感想が寄せられ、日本音楽との共通性と異質性を肌で感じたようであった。銭先生の講演も「楽器にまつわるお話が聞けて楽しかった」「鼻笛は選ばれた人しか吹けないというのはおもしろい」など好評で、音楽の文化的な意味を知るきっかけにもなった。

公演後は、静岡大学学生教員有志との交流会を大学生協グリルで開催した。交流会の企画やアトラクションは、文化芸術事業実習の受講生が行い、韓国と中国の留学生も参加した。アトラクションとしては、音楽文化専攻の学生を中心に「よさこいソーラン」のパフォーマンスを行った。短い間ではあったが手作り感あふれる交流ができ、それぞれの文化の違いを知り、尊重しあうことを学ぶ機会となった。

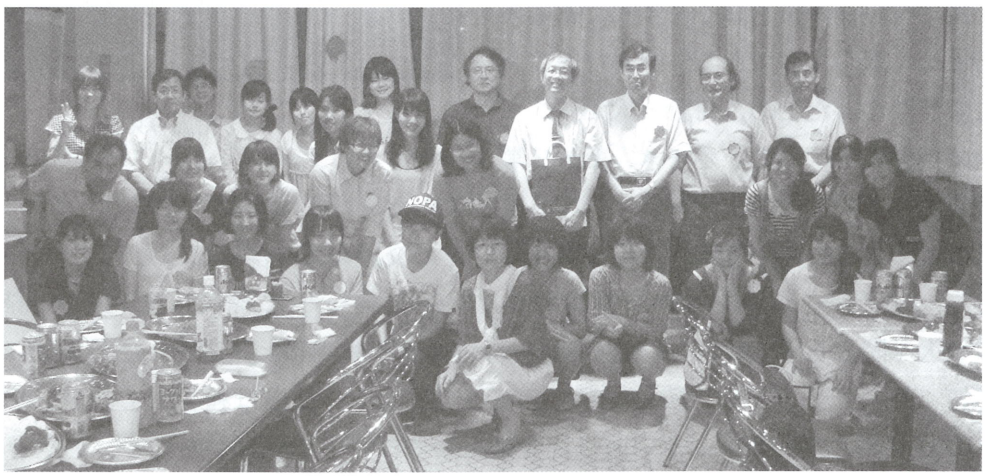

写真３　交流会